

Dinosaur Topics



春期特別展「よみがえる日本の恐竜たち」

日本初の新属新種の翼竜「ニッポノプテルス」

令和7年度博物館のできごと

恐竜博物館の教育普及活動

写真で読む地球史 18「モンタナ州の後期白亜紀の地層とティラノサウルス類」

春期特別展

「よみがえる日本の恐竜たち」



春期特別展「よみがえる日本の恐竜たち」テープカット

令和7年3月8日（土）から5月11日（日）にかけて春期特別展「よみがえる日本の恐竜たち」が開催されました。期間中、18,387人の観覧者を集めました。

近年、海外からも注目を集めるようになった日本の恐竜化石。その進展の裏側には、国内のそれぞれの地域において化石の探索に情熱を傾ける人々、化石の保存と価値の発信に携わる地域の博物館、それに、化石に残された様々な証拠から仮説を導き出す研究者や復元した姿を示すパレオアーティストたちのたゆまぬ努力がありました。今回の展示は、このような日本の恐竜化石に関する調査や復元に焦点をあてたものでした。

展示会場には、北海道むかわ町穂別地区から発掘されたカムイサウルスや、兵庫県丹波市から発掘されたタンパティタニスの全身骨格が並びました（写真）。いずれの標本も九州初公開。このふたつの骨格を同時に見ることができる初めての展覧会でした。徳川広和氏作製の恐竜の復元模型 23 体が並び、自由にメッセージや絵を描き残せるコーナーも設けられ好評でした（写真）。



徳川広和氏作製の恐竜の復元模型



メッセージコーナー



日本を代表する恐竜の全身骨格、カムイサウルスとタンパティタニス

令和7年3月29日には北海道大学総合博物館教授 小林快次博士、兵庫県立人と自然の博物館研究員（当時）久保田克博博士を招き、記念講演会が開催されました。久保田博士の「兵庫県の大地に眠る恐竜たち—白亜紀前期の世界を探る—」と題した講演と、小林教授の「恐竜時代の終焉と北海道の恐竜—カムイサウルスが語る—」と題した講演がありました。両博士から北海道や兵庫県の恐竜化石や海外での野外調査の様子など、興味深い話題が提供されました。講演の後たくさんの質問があり、サインや記念撮影を希望する子どもたちが列を作りました。



よみがえる日本の恐竜たち記念講演会

日本初!の 新属新種の翼竜「ニッポノプテルス」

御船町に広く分布する御船層群上部層(後期白亜紀の地層)から産出していた「アズダルコ科」の翼竜の化石が新属・新種であると判明し、2025年3月に「ニッポノプテルス・ミフネンシス」と正式に名付けられました。日本で見つかった翼竜の化石から学名がつけられるのは初めてのことでした。

1990年の熊本大学の調査で天君ダム上流に骨化石層が露出していることがわかり、1996年に御船町が「恐竜化石調査委員会」を組織して実施した発掘調査で化石が採取されました。その後の調査でアズダルコ科の翼竜の頸椎骨であることが判明し、2000年には、御船町恐竜博物館、ブラジル国立大学、国立科学博物館などが共同で研究を行い、日本では初の発見となるアズダルコ科の翼竜化石として論文が発表されていました。



ニッポノプテルス化石の発掘現場



ニッポノプテルス頸椎骨

今回の研究には、中国 石河子大学、御船町恐竜博物館、ブラジル サンパウロ大学動物学博物館、熊本大学、北海道大学の研究者が参加し、CTスキャナーを用いて頸椎骨内部の構造を確認したり、今までに見つかっている化石と比較したりして、固有の形の有無と系統関係が調べられました。

属名の「ニッポノプテルス」には、「日本の翼」という意味があり、種小名の「ミフネンシス」には「御船産の」という意味があります。後期白亜紀に繁栄したアズダルコ科の翼竜は長い首をもつことが特徴で、ケツアルコアトルスなど翼を広げた時の幅が10メートルを超えるような種類が含まれるグループです。ニッポノプテルスもその一員ですが、大きさは3メートル程度。このなかまの翼竜としては、それほど大きな種類ではありませんでした。しかし、今回の研究で首の骨には、巨大なケツアルコアトルスと共通する特徴もあり、これらの大型翼竜の祖先にあたる動物だった可能性が指摘されました。



ニッポノプテルスの生体想像模型





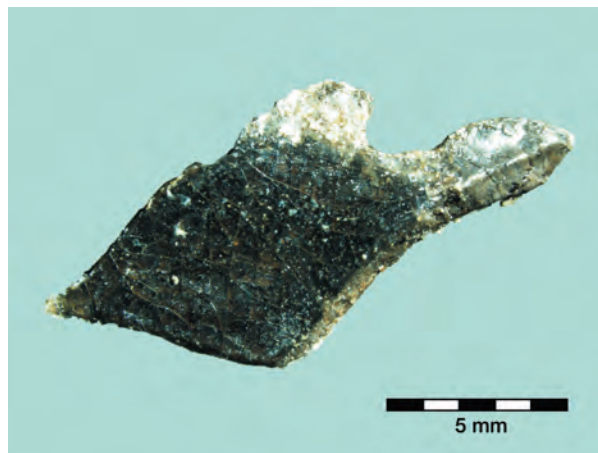
ガー科魚類化石発見

御船町恐竜博物館、北九州市立自然史・歴史博物館、ブラジル・リオデジャネイロ州立大学の研究チームによって、熊本県御船町に分布する後期白亜紀の地層、御船層群上部層の魚類の化石が、ガー科魚類の化石であることが確認され、2025年8月に発行



ガー科魚類の生体想像模型

された国際学術誌ヒストリカル・バイオロジーズに論文が掲載されました。これはアジア初の発見であり、白亜紀のガー科魚類の分布に対して新たな知見をもたらすものでした。



ガー科魚類の鱗の化石

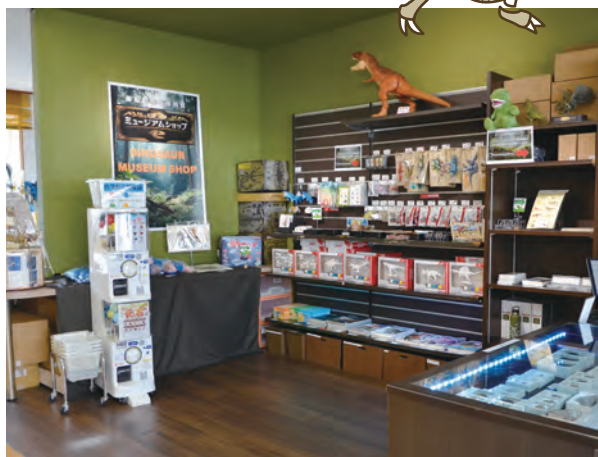
ミュージアムショップ移転

これまで博物館が直営していたミュージアムショップについて、より良い運営を図るため、令和7年10月から民間事業者へ業務委託を開始するとともに、博物館に隣接する御船町観光交流センターへ移転しました。

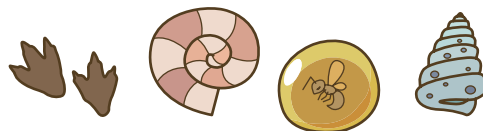
ミュージアムショップは、単にお土産を買う場所ではありません。展示を見終えたあとにミュージアムショップで商品を手にとると、展示を見て感じたことや学んだことを思い出したり、新しい発見につながったりすることがあります。お気に入りの一品を持ち帰ることで、博物館で過ごした時間が日常の中でもよみがえり、学びが続いていく——。そんな役割も、ミュージアムショップにはあります。実際に、イギリスの博物館で行われた調査では、ミュージアムショップの利用者148名のうち75%以上が「ショップを利用する予定で来館した」と回答しました。そしてその内6名は、ミュージアムショップで買い物をすることを目的に博物館を訪れていました⁽¹⁾。このように、ミュージアムショップは展示と並ぶ「博物館の顔」として⁽²⁾、多くの人に親しまれているのです。

さらに近年では、ミュージアムショップの「学び」の場としての役割に加え、博物館と来館者、そして地域社会をつなぐ場としての役割にも注目されています。人と人、人と地域を結び付けることで、社会全体の持続可能な発展にも貢献できる可能性があると考えられているのです⁽³⁾。

私たちは、ミュージアムショップを訪れた皆さまに「来てよかった」と感じていただけるよう、そして、ここでの出会い・学び・つながりが暮らしの中でも続いていくよう、これからもより魅力あるショップづくりに取り組んでまいります。



移転後のミュージアムショップ



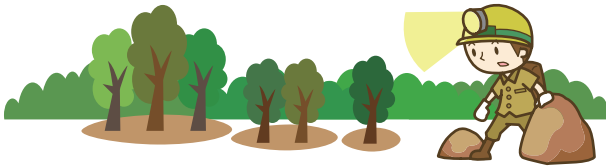
参考文献

- (1) KENT, Tony. The role of the museum shop in extending the visitor experience. *International Journal of Nonprofit and Voluntary Sector Marketing*, 2010, 15.1: 67-77.
- (2) 和田岳ほか、ミュージアムショップは売店で良いか？ 日本の博物館のこれから - 「対話と連携」の深化と多様化する博物館運営 - 平成 26-28 年度 日本学術振興会科学研究費助成事業研究成果報告, 2017: 27-35.
- (3) LARKIN, Jamie et al., The role of the museum shop in sustainable futures. *Museum Management and Curatorship*, 2026, 41.3: 527-546.



アジア恐竜国際シンポジウム

令和7年9月26日～9月30日まで、第6回アジア恐竜国際シンポジウム（The 6th International Symposium on Asian Dinosaurs in Japan 2025）が福井県立大学等を会場として開催されました。日本、モンゴル、中国、韓国、タイなどから合計150名の参加があり、44件の口頭発表と47件のポスター発表がありました。当館から池上直樹主任学芸員も参加し、口頭発表を行いました。シンポジウム後は、福井県立恐竜博物館での公開イベントや巡検も行われました。



シンポジウム後の巡検。福井県勝山市の恐竜化石発掘現場。

日本博物館協会博物館活動奨励賞受賞

当館の池上直樹主任学芸員が執筆した論考が日本博物館協会の博物館活動奨励賞に選定されました（受賞論考：「地域から始める国際交流—なぜ地域の博物館が国際的な連携に取り組むのか？」博物館研究 第59巻10号）。表彰式は、令和7年11月19日から21日にかけて大阪市中央公会堂を主会場として開催された第73回全国博物館大会に先立って行われました。

この賞は、日本博物館協会発行の学術雑誌「博物館研究」に掲載された記事の中から、毎年、優れた論考2～3件が選出され表彰されているものです。選定にあたっては、単発的になりがちな国際交流を継続的に展開し、小規模な博物館でありながら近隣の他の博物館や地域にも連携の輪を広げた事例の報告が全国の小規模博物館に元気を与えるものと評価されました。



全国博物館大会での表彰式（提供：大阪市博物館機構）

福井県立大学恐竜学部との連携協定

令和7年12月18日、御船町恐竜博物館は、継続的な連携を図るため、福井県立大学恐竜学部と連携協力協定を締結しました。

福井県立大学永平寺キャンパスで締結式が行われ、福井県立大学恐竜学部の西弘嗣学部長と当館の山本國雄館長が協定書に署名しました。この協定によって、福井県と熊本県の両地域における、恐竜学をはじめ、古生物学、地質学、博物館学の各分野での教育・研究活動の推進と、学術的成果の社会への還元などが期待されています。



連携協力協定締結式。協定書に署名した山本國雄館長（左）と西弘嗣学部長（右）（提供：福井県立大学）



恐竜博物館の教育普及活動

令和7年度に実施した教育活動の一部をご紹介します。

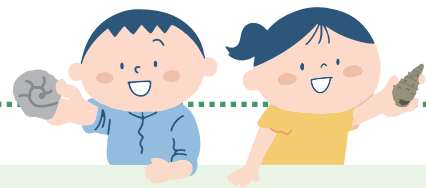
令和7年度の実績

項目	実施回数	延べ参加人数・対応人数
個人・家族向け学習支援活動※1	59件	2,079人
教育機関・各種団体への学習支援活動 (館内での体験/学習活動や、講話等)	162件	4,066人
アウトリーチ活動 (出前授業、セミナー講師、化石採集、出張イベント等)	61件	2,317人
ICTを活用した学習支援活動※2	2件	92人
実習・研修対応※3	10件	109人

※1: (内訳) わくわく体験教室: 24件 (1,320人)、パレオプログラム・パレオアドベンチャー: 12件 (476人)、ジオスクール: 8件 (174人)、ジオセミナー: 1件 (31人)、オンラインジオセミナー: 1件 (32人)、図書館コラボイベント: 1件 (31人)、ジュニアキュレーター養成講座: 6件 (7人)、プリパレーター養成講座: 6件 (8人)

※2: (内訳) 遠隔授業・講座: 1件 (60人)、オンラインジオセミナー: 1件 (32人)

※3: (内訳) 博物館実習: 1件 (6人)、教職員研修: 1件 (4人)、視察: 8件 (99人)



わくわく体験教室

令和7年度のわくわく体験教室は、毎月第2・第4土曜日の10時～、13時～、15時～の3回に分け、合計13種類/計24日の体験を行いました。

恒例の「新規わくわく体験」は、「古生物のトリックアートづくり」を行いました。トリックアートにはいろいろな種類がありますが、今回利用したのは、見る方向を左右変えることで、左右別々の絵が見えるという不思議なトリックです(左方向から見るとアロサウルス、右方向から見るとステゴサウルス、というように)。用意した絵柄は、肉食恐竜と植物食恐竜のペア、今の動物と大昔の動物のペアです。何度も見たくなる楽しいトリックアート作品となりました。

そしてこの体験では「昔のゾウと今のゾウ」に関するお話をしました。まず、今のゾウは、アジアゾウ・アフリカゾウ・マルミミゾウの3種類がいることを確認してから、大昔にいた、ブタほどの大きさでコビトカバによく似た姿をしたゾウの仲間・メリテリウム(モエリテリウムとも)のイラストを見ました。次に、体が大きくなり牙が生えたデノテリウム、さらに現在のゾウに近い姿をしたステゴテトラペロドンなどのイラストを見比べながら、今のゾウと大昔のゾウの似ているところや違うところを探しました。

さて、「わくわく体験教室ポイントカード」の5ポイント目のプレゼントに、「博物館オリジナル缶バッジ」のカプセルトイが登場しました。缶バッジは直径約3cmで、8種類の古生物の生き物がデザインされたかわいいプチサイズです。背景が白色のものはノーマル、キラキラしたタイプならレア仕様となっています。どの缶バッジが出るかはお楽しみ!お子様にも大好評です。

なお、体験教室の様子をFacebookで紹介することもございます。活動の様子や詳しい内容をご覧になりたい方は、ぜひチェックしてみてください。

※体験教室への参加には、別途観覧料が必要となりますので、定期観覧券の購入をお勧めしています。



昔のゾウと今のゾウ(今回のお話)



わくわく体験5ポイントプレゼント用カプセルトイ



わくわく体験教室「古生物のトリックアートづくり(新規わくわく体験)」

パレオプログラム

今年度は、4つの新規学習プログラムを作成しました。そのうち、「はかせきハカセ〜いろいろな生き物の歯の化石〜」（令和7年6月22日実施）では天草市立御所浦恐竜の島博物館の廣瀬浩司学芸員を、「せいこん化石の不思議」（令和7年11月16日実施）では岩手県立博物館の望月貴史学芸員を、それぞれオンラインゲストティーチャーとしてお迎えし、約15分間の講話をしていただきました。御船層群以外の地層から発見されるさまざまな化石や、化石からわかる当時の環境、生き物の生態について学ぶことで、地学のスケールの大きさや面白さを実感することができました。そして、専門家との交流によって、化石や古生物への興味・関心がより一層深まりました。



「はかせきハカセ〜いろいろな生き物の歯の化石〜」の様子

誰もが楽しめる博物館を目指して ～インクルーシブな博物館へ～

時代の変化とともに、博物館に求められる役割も大きく変わってきました。2022年にICOM（国際博物館会議）※が新たに定めた博物館の定義では、「研究・収集・保存・展示」といった従来の役割に加え、「包摂」「多様性」「持続可能性」「コミュニケーション」といった単語が盛り込まれています。これからの博物館には、資料を守り、調査・研究の成果を伝えるだけでなく、多様な人々と協働しながら社会課題の解決に貢献することが求められています。また、障がいの有無や年齢、性別、国籍などにかかわらず、誰もが安心して楽しみ、学べる場であることも大切な使命の一つです。当館でも、こうした役割を果たすため、さまざまな取り組みを進めています。今回はその中から、「博物館に行きたくても行くことが難しい方」に向けた取り組みをご紹介します。

※ICOM（アイコム：国際博物館会議）は、博物館の進歩発展を目的として1946年に創設された組織。世界各地の博物館専門家が、博物館に関わる問題や知識、革新的な実践などについて話し合い、交流している。2022年8月に制定された博物館の定義は次のとおり。「博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、楽しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する。」（日本語訳、ICOM日本委員会HPから）



・オンラインイベントの開催

令和7年8月2日に開催したジオセミナー「天体衝突から地球を守るープラネタリーディフェンスの現状と課題」では、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）宇宙科学研究所（ISAS）准教授の吉川真博士をオンライン講師にお迎えし、Zoomによるオンラインセミナーを開催しました。当日は、当館2階の体験交流室でセミナーの様子をスクリーンに投影し、来館した方も視聴できるようにしました。参加者の方からは、「もっとお話を聞いていたかった」「とても勉強になった」「専門家の講義を受けられる貴重な機会だった」と大変好評でした。

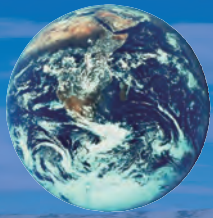
・3DCG教材を活用した学びの提供

学校教育では、子どもたちの学びをより豊かなものにするため、図書館や博物館、美術館といった地域の施設を積極的に活用することが求められています。しかし、学校が博物館を利用する際には、時間割の調整や移動手段・予算の確保、安全面への配慮など、さまざまな課題が存在します。

そこで当館では、教室にいながら博物館の資料をより手軽に楽しく利用できるよう、武蔵野大学の飯田和也准教授と協働して3DCG教材を作成しました。3DCGとは、資料を立体的に（縦・横・奥行き）の3方向から）デジタル化した画像のことで、パソコンやタブレットを使って、さまざまな角度や倍率で自由に観察を行うことができます。今年度は、御船層群の露頭を3DCG化し、御船中学校1年生の理科授業で活用しました。今後は、教材の充実を図るとともに、児童生徒へのアンケートなどをおして、教育効果より良い活用方法について検証を進めていく予定です。

DIVERSITY & INCLUSION





「モンタナ州の後期白亜紀の地層とティラノサウルス類」

御船町恐竜博物館 池上 直樹

今から 7500 万年前の北アメリカには、大型肉食恐竜ダスプレトサウルスが生息していた。ダスプレトサウルスは、ティラノサウルス科の恐竜であり、ティラノサウルスが出現する時代の約 800 万年前に繁栄していた恐竜だ。ティラノサウルスよりひとまわり小さいが、ティラノサウルスと同じような特徴を備えていた。

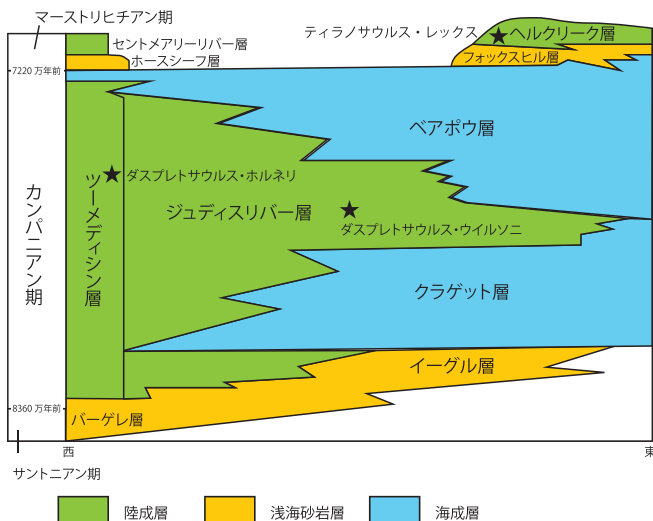
モンタナ州立大学ロッキー博物館にはダスプレトサウルス・ホルネリ（英語ではホーナライと発音）の全身骨格が展示されている（写真）。モンタナ州西部のルイスアンドクラーク郡で発掘され、硬い砂岩層に保存されていたこの骨格の一部は、御船町恐竜博物館のプリパレーター（資料技師）によってクリーニングされたものだ。ダスプレトサウルスには、トロスス（7700 万年前）、ウイルソニ（7650 万年前）、ホルネリ（7560 万年前）の 3 種が知られており、トロススは、カナダのオールドマン層、ウイルソニは、モンタナ州のジュディスリバー層、ホルネリは、モンタナ州のツーメディシン層から見つかった。ホルネリは、最も新しい年代のダスプレトサウルスである。



ベアボウ層。白色の薄い地層はこの地層を特徴づけるベントナイト（火山灰に由来する粘土層）。



ヘルクリーク層。河川の流路に堆積した砂と周辺の湿地に堆積した泥の地層が重なっている。



モンタナ州の後期白亜紀層の地層断面概念図（Rogers et al., 2016 に基づき簡略化して作成）。

ダスプレトサウルスが産出するこれらの陸成層は、海成層のベアボウ層に被われている。ベアボウ層は、カンパニアン期のアンモナイトやイノセラムス、海生爬虫類の化石を産出することで知られている。当時、海水準が上昇し、陸地に海が広がったのである。

やがて海水準が下がると、沿岸の砂質堆積物フォックスヒル層など*が形成され、さらに海退が進み、河川による陸成層が形成された。これが、この地域における白亜紀の最後の地層、ヘルクリーク層である（写真）。ヘルクリーク層は、ティラノサウルス・レックスの化石を数多く産出することで知られている。

このように化石記録を見ると、ティラノサウルス科の恐竜たちは、海水準が上昇した約 500 万年の間に異なる属に入れ替わったことが分かる。

※地域によって地層名は異なる。



モンタナ州立大学ロッキー博物館のダスプレトサウルス全身骨格。この化石の一部は、御船町恐竜博物館でクリーニングされた。



モンタナ州立大学ロッキー博物館のティラノサウルスの全身骨格（モンタナのティラノサウルス・レックス）。

文献：

Rogers, R. R., Kidwell, S. M., Deino, A. L., Mitchell, J. P., Nelson, K., and Thole, J. T., 2016. Age, Correlation, and Lithostratigraphic Revision of the Upper Cretaceous (Campanian) Judith River Formation in Its Type Area (North-Central Montana), with a Comparison of Low- and High-Accommodation Alluvial Records. The Journal of Geology, 2016, volume 124, p. 99–135, The University of Chicago.